

『病院』 創刊 60 周年にあたって

『病院』は病院の発展に寄興する目的をもつて経営する、病院を経営するもの、病院に勤務するもの及び病院を利用する民衆——の三者が一体となつて初めて、よい社会に必要なよい病院を生み出すことが出来るだろう。『病院』はこの三者の意見を交換する機関となることを企図している。よい病院を生み出すために、お互に知識を提供しあい、意見を述べあい、反省しあつて、その間に存在する不合理、誤解、矛盾——等の、よい病院を生み出す障害となるものを分析し検討して、お互の正しい理解をもち合おうではないか。そしてお互の理解は、その日から病院をよりよくするに違いない。

これは、創刊当時の雑誌『病院』の理念を示した文章である。

1949年7月1日、「よい病院はどうあるべきかを研究する雑誌」として『病院』が創刊された^{*1)}。『病院』が生まれた経緯については、本誌の生みの親の1人、久松栄一郎氏が創刊号の編集後記に執筆している。

それによると、若き日にわが国の病院問題について幾夜も討議した医師たちが、戦後の傷がまだ癒えぬ1949年の春に旧情を温めたある日のこと、わが国の病院の質的発達の為に『病院』という雑誌を世に送ろうということになった。ちょうど厚生省においても、GHQの指導の下、病院管理を科学的にとりあげ、病院管理を教育する研修所を創設する案が考えられていた際であった。そうして、厚生省病院管理研修所の吉田幸雄氏らとともに、雑誌を創刊することになったという。

創刊時編集委員の面々は、橋本寛敏氏(聖ルカ病院)、尾村偉久氏(厚生省)、吉田幸雄氏(厚生省)、守屋博氏(東京第一病院)、千種峯蔵氏(済生会)、木下正一氏、ならびに久松栄一郎氏である^{*2)}。病院管理研修(究)所や日本病院協会の学会誌的な役割も担いつつ、雑誌『病院』は日本の病院管理の発展に貢献してきた。

このたび、人間なら還暦を祝うところの創刊60年を迎えるにあたり、これまでに雑誌『病院』で議論してきたことが、わが国の病院・医療界の中でどう変わり、また変わらなかったかを見てみようということになった。そこから明日の病院運営

の視座も得られるのではないかと。こうして、ここに現在の本誌編集委員 6 人、編集顧問 3 人と、日本赤十字看護大学の看護歴史研究室的川島みどり氏らの尽力を得て、特集「温故知新—これまでの特集から振り返る」をお届けする。

振り返る中で出てきたのは、日本の病院をよくしようと力を尽くしてきた医療関係者らの真摯な姿勢である。そして、『病院』にて論じられたことが病院現場での実践のヒントとなったり、問題提起となったりして、少なからず病院医療に影響を与えてきたことがわかる。医療を取り巻く状況は厳しくとも、発言することで一石を投じることができるかもしれないという希望はある。今や「病院」という言葉が示すイメージは単純なものではなくなり、医療を提供するものを広く捉えた用語が必要かもしれないが、雑誌『病院』は今後もよい医療を生み出すための場でありたいと願う。今後も各方面からの寄稿を期待する。

なお、60 年間に掲載された内容は膨大なものになるため、今回の特集で取り上げた各テーマについては、特集形式となった 1962 年の 21 巻(創刊 14 年目)からを主とし、その変遷を表す特徴的な論文を執筆者に選んでいただいた。巻頭のグラフとその関連特別記事については、創刊から戦後の医療史とともに振り返っている。また、病院建築は創刊当時の病院管理の重要な一分野であり、座談会にて語っていただくことにした。これまでに、「10 周年記念号」(1959 年 18 巻 7 号)、「本誌創刊 15 周年記念特集」(1964 年 23 巻 6 号)、『病院』発刊 20 周年を迎えて」(1969 年 28 巻 6 号)等の記念号を発刊しているので、総目次とともに参照されたい。

(編集室)

- *1) 1～15 巻までは半年に 1 巻(6 冊)の発行であり、16 巻から 1 年に 1 巻(12 冊または増刊号を含めた 13 冊)の発行となった。したがって、巻数と創刊からの年数は一致しない。
- *2) 久松氏、木下氏は創刊号には所属が記載されていないが、久松氏は小児科医で当時学術書院の編集長、後に中央大学保健学教授。木下氏は賛育会病院院長であり医学書院の顧問的な立場にあった。『病院』を発行した学術書院は医学書院の前身。1943 年の企業整備令に基づき金原商店が 2 分されてできたうちの 1 つである日本医学雑誌株式会社と、1947 年に創設された学術書院が 1950 年に合併して医学書院となった。